国家の工業化ビジョン

明治政府の学習プロセス

天津邦明

途上国工業化の失敗パターン

古くて新しい課題

工業化ビジョンとは

- 定義「国家指導者と工業化政策の立案省庁が考える、将来どのような産業を自国に持ちたいか、その状態に到達するためにどのような産業発展のシナリオを描くか、当該産業の担い手として誰を想定するか、工業化プロセス全体及び個々の産業における政府の役割をどのように考えるかに関する国家的な展望 」（天津 2020；2025）
  - **業種構成**
  - **産業発展のシナリオ**
  - **想定する担い手**
  - **政府の関与方法**

- **ビジョンの存在形態は様々：**公式文書になっているとは限らない

何故、明治日本か

- **戦後日本の高度成長：**戦前にすでに工業化を実現していたことを考えると、奇跡ではない。**二次にわたる産業革命**＝①日清戦争ころ（軽工業）、②日露戦争ころ：重工業）⇒**工業化の成功例**

- **初期条件に恵まれたのは確か**
  - 国家機構、行政の担い手
  - 市場経済、ものづくりの経験

- **ベンチマークとしてクリア**
  - 近代工業化 before/after
  - 試行錯誤の変遷を捉えやすい
  - そうしたなかで、重要な要素がすっきり、かつ凝縮されている

明治期の工業化ビジョンの変遷

	幕末・工部省時代	内務省時代	農商務省時代
ビジョン形成	ユーフォリア（熱狂）や願望に基づく形成	ユーフォリアや願望に基づく形成の中で、現実に基づく形成が徐々に芽生える	現実に基づく形成
ギャップの大小	大	縮小途中	さらに縮小
産業構成	国家建設に必要な産業（煉瓦、セメント、硝子）、軍事産業（製鉄、造船、輸出産業（生糸、鉱業）	同左と在来工業	同左
工業化の担い手	官営工場	民間企業。実質的には官営工場	民間企業
政府介入のスタンス	単純なコピー＆ペーストによる直接的介入	直接的介入	間接的介入

低所得国・下位中所得国の工業化に向けて

- 国家指導者らの工業化に対する本気度
- 政府サイドが、産業関係者との共通言語でコミュニケーションをとれること（含む、製造業部門に向き合うこと、政府内部での技術官僚の形成、知識・経験の蓄積⇒製造業以外でも言えること）

  ⇒戦後日本の通産省もそうだった（第4章、和田）
- 「気づきのファクター」にタイムリーに反応し、必要があれば軌道修正をすること⇒政府による投資判断で、大きな失敗をしないこと
- 現在の低所得国・下位中所得国が製造業主導によらない経済発展モデルを模索する場合でも、本質的な要素は変わらない
- 上位中所得国：キャッチアップ過程の終了後で道に迷う局面がある